

<関東ブロック例会報告>**「ユネスコ『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』から
日本の性教育を考える」**

日時：2018年2月10日(土) 18:00～20:15

於：早稲田奉仕園

2017年度の全国集会では、「有名大学」学生による相次ぐ性暴力事件を受け、「学生の性暴力と大学の責任」をテーマにシンポジウムが行われ、ポルノ文化や性教育のあり方が大きな論点となった。その中で複数の登壇者から、ユネスコの『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』（以下、『ガイダンス』）について紹介があったことから、関東ブロックでは、この『ガイダンス』の内容についてより詳しく学び、日本の性教育について考える機会を設けたいと考えた。そこで『ガイダンス』の訳者の一人であり、“人間と性”教育研究協議会幹事を務めておられる、埼玉大学の田代美江子さんを講師にお迎えし、お話を伺った。

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』は、2009年にユネスコから刊行され、訳書は2017年に明石書店から出版されたばかりである。多様性を基本的前提としていること、科学的であることを尊重していること、子どもたち自身の「性的自己決定能力」の獲得を目的としていることなどの特徴があるという。6つの主要な概念についてそれぞれ年齢別の学習目標が掲げられており、主要な概念の第一には「人間関係」が位置づけられ、「価値観、態度、スキル」「文化、社会、人権」がつづく。セクシュアリティについての適切な理解は、人権や人間関係についての適切な理解と不可分であることが分かる。「人間関係」概念においては、例えば「ハラスメント」が人権侵害であることを理解することは9～12歳、日本でいえば小学校高学年の学習目標となっている（実際には、成人でもこれを理解していない人は多いが…）。田代さんは、現場での性教育の授業づくりにも関わっておられることから、『ガイダンス』の理念を、性教育の現場の先生方や子どもたちの様子と関連づけながら、非常に分かりやすく、また説得力のある形で話して下さった。

現在のところ、日本においては、国としてこの『ガイダンス』を活用する動きは全く見られないという。東アジアにおいても各国の性教育に『ガイダンス』の影響が見られるとのお話を伺いながら、世界の性教育のスタンダードから日本だけ大きく取り残されている現状に焦燥感を感じずにはいられなかった。

同書は、早くも品切れ状態とのことで、国内でも関心が高いことが伺える。また訳者の田代さんにはちょっとショックでもあったそうだが、2018年1月に改訂版が出たそうなので、そちらの訳出も待たれるところである。改訂版には「Violence and Staying Safe(暴力と安全の保持)」という章が新たに設けられたということで、さらに注目したい。

(文責：上田智子(関東ブロック))

